

## 抜粋その1

「まだここが残っています」

そして、自分の唾液で濡れた野分の指が、後孔へと押し当てられる。予想も付かない行動に、弘樹は目を向いた。未だ何物も受け入れたことがないそこは当然固く閉ざされていて、侵入してこようとする異物を頑なに押し返す。

「何するんだ！」

弘樹は激しく抵抗した。普通はそんなところには何も入れない。そして、そもそも他人に触らせるところではない。だが、両手は縛られている上に、野分の大きな体躯に押し掛かれてしまっている今、弘樹にはどうすることもできなかった。身体の無意識での反発に構うことなく、野分は無理にでも指を押し込もうとしてくる。

「っ……」

やがて後孔に引き攣れるような痛みが走り、弘樹はそこに指が入ってしまったことを知った。弘樹は愕然とした。その衝撃は、口の中を蹂躪されたときの比ではなかった。敵に弱みなど見せたくなくとも、その意思とは裏腹に二つの瞳からは自然に涙が溢れてきそうだった。

「なんで……こんなところ、何かを入れるところじゃないだろう……!」

「弘樹さん、知らなかったのですか？　ここは何かを隠すのに常套の場所なんですよ」

にっこりと優しい声でそう言われようとも、そこに外部から何かを入れられるなど、弘樹の常識では考えられない。

「そんなの、知るか！」

押さえ込まれた身体でも弘樹は必死に振る。

胸の奥からせり上がってくる吐き気。有り得る筈もないところに与えられた圧迫感が、激しい嫌悪を呼び起こした。

だが、今回は中が空であることを確かめて終わりではなく、野分は更に奥へと指を潜り込ませてきた。

「すごい、どんどん入りますね」

挿れられる前にはあれほど固く拒んでいた窄まりも、指先が一旦その入り口を通過すると、弘樹の唾液が滑りをよくしてくれるおかげか、後はすんなりと根元まで受け入れてしまう。内臓の奥をぐちゃぐちゃに掻き回されて、入り口は二本の指で左右に押し広げられた。

「う……う……」

苦しくて思わず呻く。

## 抜粹その2

惜しげもなく嬌声を零しながら、それでも弘樹は首を横に振る。すると、野分は態とらしく溜息を吐いた。

「だったら、反抗的で生意気なこの口は、塞いじゃっても問題ありませんよね？ さっきから可愛い姿を見せ付けられて、俺もう限界です」

野分は軍服の下衣の前を寛げて、猛った欲望を取り出す。そして、弘樹が思考を巡らせる間もなく、野分は片方の手で指を器用に使いながら唇を扶じ開け、またもう片方の手は弘樹の髪の毛を引っ掴んで、唇にできた僅かな隙間から凶悪ともいえる大ききさのものを、一気に弘樹の喉の奥へと突き入れた。

余りの衝撃に、弘樹は思わず呻く。

「可愛げのない口だけど、喘ぎ声は…素敵でした…！！」

弘樹の口に脈打つ欲望を啜えさせた彼は、恍惚とした表情で謔言のように呟いた。だが、喘ぎ声を褒められたところで、ちっとも嬉しくない。それよりも、口の中に押し込まれたものを、今すぐにでも抜いてほしかった。気持ち悪さと苦しきから早く解放されたい。

だが、弘樹の願いも空しく、野分はそのまま弘樹の後頭部を両手で掴んで、前後に激しく揺さ振りだした。

「うぐ…っ！」

喉の奥を目掛けて、何度も凶器が突き立てられる。指での行為が矮小なものに思える程、男根で齧される苦しさは段違いで、今にも意識が遠退きそうだった。

膝立ちの姿勢であるのに腕が自由に使えないため、野分を受け止めるとき強い衝撃に対して、身体を支えることができず均衡を保てない。野分の両手だけが頼りというのは、なんと皮肉なことだろう。握り締める手に力が入る。

やがて、野分のそれは一段と硬さと大きさを増し、弘樹の喉の奥に大量の白濁した液体を吐き出した。一気に意識が覚醒する。当然のことながら上手く受け止めることができず、弘樹はごぼごぼと嘔せた。猶もしつこく絡みついて口内に留まろうとする残滓を、一刻も早く吐き出してしまおうと弘樹は首を下に向ける。しかし、野分に顔をくいと持ち上げられて、喉仏を摩る四本の指と共に、世にも悍しい『お願い』が言い渡された。